

「学ぶ観光」の不在にみえる歴史教育の課題

Consideration of the Subjects in a History Education through the Viewpoint of “Learning Tourism”

須賀 忠芳*

1. 問題の所在

「学ぶ観光」とは、カロリン＝フンクが、修学旅行に代表される教育観光としてのEducational Tourismを観光者の視点に立って分析する概念である。その中で、フンクは、「知識自体が観光資源となり、地域が観光者の学ぶ場所」として選定される観光状況を想定し、そうした観光の態度を「学ぶ観光」と称している(フンク、2008)。近年の観光状況において、「持続可能な観光」(sustainable tourism)が標榜される中、エコツーリズムや地域資源を生かしたまち歩き観光の盛行など、新たな観光状況が現出している。しかしながら「学ぶ観光」としてのあり方を日本の観光者にあてはめて考えた時、そうした観光様態は全く「不在」とであると極言することができよう。

「学ぶ観光」の典型事例としての修学旅行を例にとれば、2014年5月に、修学旅行で長崎市を訪れた横浜市の公立中学校3年生の男子生徒5人が被爆体験を語る語り部に対して「死に損ない」などと暴言を吐いたことが伝えられたことは印象的な出来事であった。暴言を受けた語り部が学校に抗議し、校長が電話で謝罪、被爆者団体は「生徒たちに学ぼうという気持ちが足りない」と嘆いたというが¹⁾、当事例に典型的なように日本の観光状況において「学ぶ観光」の存在感は甚だ不確かなものとなっているといわざるをえない。

「学ぶ観光」が定着しない状況は、見方を転じれば、短絡的な歴史事実のみを提示してきた、歴史教育のあり方そのものを照射し、その課題を浮き彫りにしていることにつながるのではないだろうか。本稿の課題は、「学ぶ観光」の不在を切り口に、そこから見える歴史教育の課題に焦点をあてるものであり、なおかつ、そこにおいて、「学ぶ観光」を定着させ、歴史教育の活性化を図るための方策を考察することを命題とするものである。あわせて、筆者の取り組んだゼミ研究における地域調査を「学ぶ観光」の事例として提示し、その意義についても検討を加えることとする。

2. 「学ぶ観光」の不在と「教育」の相関性

「学ぶ観光」は、果たして本当に機能し得ていないのだろうか。日本人の観光志向においては、奈良・京都に代表される「史跡・名所」は、常に上位を占めるものであり、それらが、「学ぶ観光」

* 東洋大学国際地域学部：Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

としての機能を果たしていると言えなくはない。京都で鹿苑寺金閣の壮麗さに感嘆し、奈良で東大寺大仏の巨大さに驚嘆することは、確かに、足利義満の時代の造作に思いをはせ、聖武天皇の大仏制作への思いを実感させることができ、当該観光地を訪れることで、歴史的経過の一端を知り、「学ぶ観光」の目的を果たしているということ是可以する。しかしながら、その過程において、後継の義持が金閣以外の全ての建物を破壊したことを解として「なぜ、鹿苑寺には、金閣以外に当時の目立った建築物が残されていないのか」、また、聖武天皇が東アジアにおける進んだ仏教国としての王朝国家を誇示することを解として「なぜ、聖武天皇は、これほど巨大な盧舎那仏を建立したのか」といった事柄に思いをはせる観光者はほとんどないといってよい。この時、彼らが口にする事柄は、たとえば「きれい」「大きい」あるいは「細工が細かい」といった表面的かつ直感的なものでしかなく、そうした建造物のもつ歴史的実相に迫るものとはなりえていない。すなわち、一般の日本人の観光志向において、実物を面前にして「感じる」「感じさせている」ことはあっても、「学ぶ」ものとはなっていない。

こうした状況は、前節でも触れたとおり、「学ぶ観光」の典型として位置づけられるはずの修学旅行において、如実に示されているといえる。たとえば、1980年代初頭、秋田県の公立高校の学年団が初めて広島への修学旅行を企画した時、教頭らの介入でその実施が中止となったが、その理由の一つに「広島へ足を延ばすと費用の関係で宿泊が一泊減となる。生徒たちは旅館で騒ぐのが楽しい。一泊でも減ると納得しないだろう」とする、今から考えれば牧歌的とも思える事柄が挙げられている²⁾。組合活動との関連から、何らかの理由を付けて広島への修学旅行を撤回させようという管理職の意図が看取されるものではあるが、一方で、修学旅行の位置づけが「旅館で騒ぐのが楽しい」ことに集約されていることは注目に値する。東京高等師範学校の教頭であった高嶺秀夫が、森有礼文相の求める兵式訓練の下での行軍に異を唱える形で実施し、1887年8月初旬から9月初旬にかけて長野県から山梨県、静岡県方面で浅間山登山、皆既日食の観察、富士山登山などが盛り込まれたとされる初めての修学旅行（新谷、2001）から考えれば、文字通り隔世の感があるが、近年の修学旅行の位置づけは所詮、その程度のものであるということができる。前節で触れた、修学旅行先での被爆者への暴言も、実態としては、今に始まったことではない³⁾。一方で、前述の秋田県における修学旅行についても、行先を広島にこだわった学年団の意向は、一定の価値観に基づく平和教育の発露とも捉えることができ、生徒の意思を度外視した「学ばせる観光」にすぎなかったものであったともいえるだろう。学年団の「学ばせる」思いとは裏腹に、生徒らにそれを「学ぶ」意欲は見いだせない。「学ばせられる」ことの常態化した生徒らにとって、突然、「学ぶ」ことを強制されても、抵抗感しか生まれてこないものと考えることができる。

平和学習としての修学旅行に関連して、先述の長崎での中学生の暴言に対し、その後の報道では、当事件に触れた長崎県出身の人物から「『やっと出たな』と感じた」とする反響があったことを伝えている⁴⁾。彼は、長崎市で育ち、小学校の6年間、平和教育を受ける中で、「平和授業や被爆者の講話には価値がある」と感じていたものの、「『関わった人の感情までコントロールしようとする平和教育』には違和感を持っていた」という。さらに、記事では「被爆者の講話の感想文には『戦争は悪、核はだめ』という考えを書かないと、教師が認めない雰囲気があった。原爆資料館の見学後に『つまらなかった』などと意見を言うことも許されないと感じた。『今の平和教育は一種の洗脳。考えさせずに、最初から決められた答えがある』」とする「理想的」な平和教育を受けた側からの

率直な感想を寄せている。こうした状況は、平和教育を考える中で、しばしば指摘されている事柄で、たとえば、池野範男は、平和教育の問題点として、「心情・情緒に依存した平和教育がなされてきたこと」「都合のよい事実や認識、また生き方だけを取り上げ、特定の認識、価値観、生き方だけに囚われ、他を排除するものであったこと」「平和教育といいながら、実はその中心は戦争学習、戦争教育になっている（中略）平和を希求することは戦争を無くすことだという極めて短絡的な学習に陥っていること」の三点を挙げている（池野、2009）。

「短絡的な学習」としての平和教育の志向性は、同時にまた、戦争史跡について、一定の方向性でしか明示することが許さない社会状況も生み出しているといえる。こうした事例では、ひめゆりの塔をめぐる青山学院高等部の入試問題が事件化してきたことがその典型であるといえる。その概要は、2005年6月に、その年の2月に行われた青山学院高等部の一般入試の英語で、ひめゆり学徒隊の沖縄戦体験者の証言を聞いた生徒が「退屈だった」と感じたという趣旨の長文読解問題が出題されることがわかり、問題視されたというものであった。当該事案に際し、元ひめゆり学徒の語り部や現地マスコミらが猛反発し、同校の校長らが現地に赴いて謝罪したことで、事件は収束することとなったが、今や「聖域化」の進むひめゆりの塔をめぐる、そのあり方を批判することは全く許容しないような方向性には違和感を禁じえないものがある。同時に、入試問題としての特性は勘案することは必要なものの、当の学校側が、単なる出題者の個人的な見解でなされた作題意図を汲み取ることなく、社会的圧力の下で毅然とした対応が取れない状況には、定式化された戦争をめぐる言説の根強さを痛感させられる思いがする⁵⁾。そうした志向性は、様々な事柄をじかに見聞させ、社会に存する種々の課題を感じ取るはずの「学ぶ観光」が、一定の価値判断の下に所定の答えを見出す「学ばせる観光」に墮している状況を指し示すものとなっている。

一方で、平和教育、平和学習等を事例としながら「学ばせる」ことに重点を置いてきた従来の修学旅行の状況に対し、近年の修学旅行は既に「学ばせる」ものではなくなっていることも念頭に置かなくてはならない。筆者は、学校側でも、観光地に関わる知識・情報を掌握しきれていないことから、修学旅行における事前事後を含む学習活動についても、旅行業や観光地域の提案プログラムに依存する傾向をいう穴戸学の指摘（穴戸、2011）を受けて、「その教育的効果は認知しつつも、学校側も、修学旅行を単なる通例の学校行事の一つとして捉え、その旅行地の選定から内容、コースについて、ほとんど関心を払うものではなく、『例年どおり』に実施することに力点が置かれていること」の課題を既に指摘してきた（須賀、2013）。「学ぶ観光」が、「学ばせる」側からも「学ぶ」側からも放置されている昨今の状況の中で、観光地において、その状況を複眼的に見つめ、その景観を含めた地域全体の在り方を考える「学ぶ観光」の本質は、ほとんど機能していない。

山口誠は、グアム島の浜辺の教会で、嬉々として結婚式を挙げる日本人カップルらは、一方でそこに残るアジア・太平洋戦争時のトーチカは一顧だにしない態度を取り上げ、そうした日本人の観光状況を評して、「グアムを見ずに『グアム』を観光する日本人が、あまりに多い。忘却と無関心の『楽園』に囲まれて、見えているのに見えていないものが、あまりに多い」と述べている（山口、2007）。グアムの海岸が戦場であったことに何ら関心を払わない日本人の観光者の態度は、「戦争を無くすことだという極めて短絡的な学習」を繰り返す「平和教育」としての定式化の下に、情緒的・感情的状況を優先させつつ、教師側の指針を強制し、多面的な当時の国際状況を生徒が「学ぶ」との機会を奪い取ってきた事柄から当然のように発生した事実の帰結であったと捉えることができ

る。感情的なアプローチから単に戦争の悲惨さに触れただけの生徒たちはその歴史的事実を学ぶことから逃走し、その現場に触れ、それを見つめることをしようとはしていない。あるいはまた、その歴史的現場がどのようなものであったかを理解しようとしていないともいえる。平和教育の美名の下になされた、通り一遍の教師側の強制に反発する形で、あるいは暴言を発する者が現れ、またあるいは、「ネット右翼」に代表される、自己の感情のみを優先した排他的思想を表明する若者たちが現れたことは皮肉としかいいようがない。歴史を多面的に理解させるための方策を模索する時、歴史的な現場を視覚的に実感させ、そこから見て取ることのできる歴史の実際を、実感をもって看取させることが必要である。そこにおいて、「学ぶ観光」に改めて着目すべきであり、それが機能することで、情動主義の下に無批判に取り組んできた、平和教育に代表される歴史教育の定式化から教師・生徒ともに解放され、同時に「学ぶ観光」の不在も解消されることとなるにちがいない。

そうした問題意識をふまえ、筆者は、勤務校国際観光学科において担当する「観光学研究」の演習科目において、岩手県一関市巖美町本寺地区（以下、一関市本寺地区と記す）を当該演習の調査巡検地として選定し、一関市役所や地区住民などから聞き取り調査を実施するとともに、地域の方々との交流も図りながら、正に「学ぶ観光」を実践した⁶⁾。次節では、当地の概況と、筆者が取り組んだ、「学ぶ観光」の実践とその成果について、論述することとする。

3. 骨寺村荘園遺跡の概況と「学ぶ観光」の実践

(1) 2つの荘園絵図にみる陸奥国骨寺村荘園遺跡の様相と歴史教育的観点からの有用性

一関市本寺地区は、陸奥国骨寺村荘園遺跡の所在地であり、なおかつ中世的景観を今に残す文化的景観を有する地域である。骨寺村荘園は、中尊寺と郡地頭・葛西氏との堺相論をめぐって作成されたとされる、12世紀末の「骨寺村仏神絵図」、及び14世紀初めの「骨寺村在家絵図」の2通の荘園絵図が残存し、その間の田地や道筋の開発の経過の一端などを理解することができる点から、多くの研究者から注目を集める史跡である（吉田1989、黒田1995ほか）。なおかつ、当地域において、圃場整備等の耕地整理が全面的には行われなかったことから、田地や用水、社寺の配置など、全国各地においてほぼ失われた中世の荘園景観を、荘園絵図に即して理解し、把握することができる点がきわめて特徴的な点であるといえる。

当地の事例は、2つの絵図を活用しながら、地域の様相を認識する上で、歴史教育の観点からも有用なものと捉えることができる。まず、両図には、「駒形根」「駒形」として、当地から30km弱は離れた栗駒山の山頂が、図像の縮尺を半ば無視して描きこまれているが、それは、「この村が『駒形』『駒形根』を聖なる山として仰ぎ見る世界の一隅にあることを、どうしても示したかったため」（大石、2004）の方策であり、当村落において、栗駒山（地元では現在は「須川岳」と呼称）は「聖なる山」としての信仰の対象として、なおかつ生活の日常に密着した存在としても欠かせないものであったことがわかる。吉田の言を借りれば「山を根源として世界が形成されているとする伝統的な地域像」（吉田、1989）を当地と栗駒山の関係性から見出すことができ、その反映としてあえて両図に栗駒山が描かれていくのであり、村落絵図が、単なる地域図ではなく、村落における信仰を

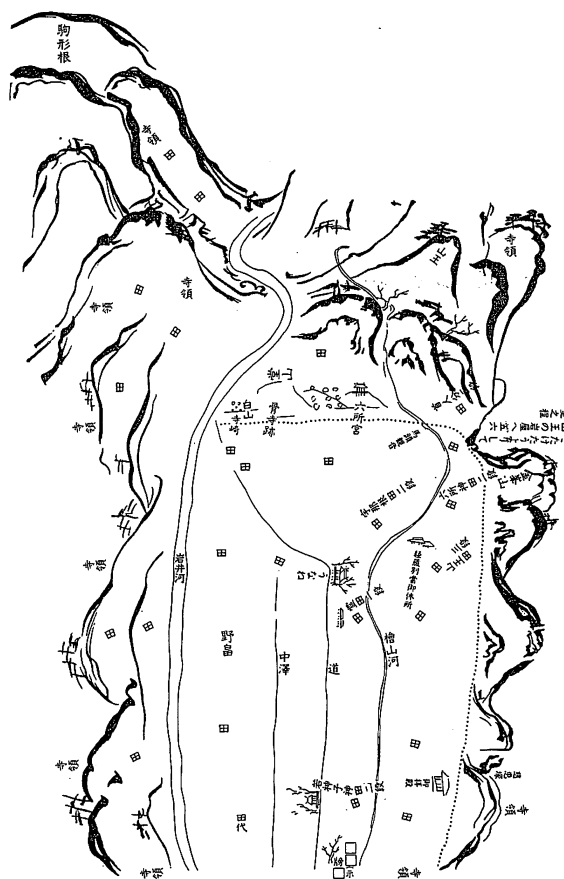


図1 陸奥国骨寺村絵図（簡略絵図）

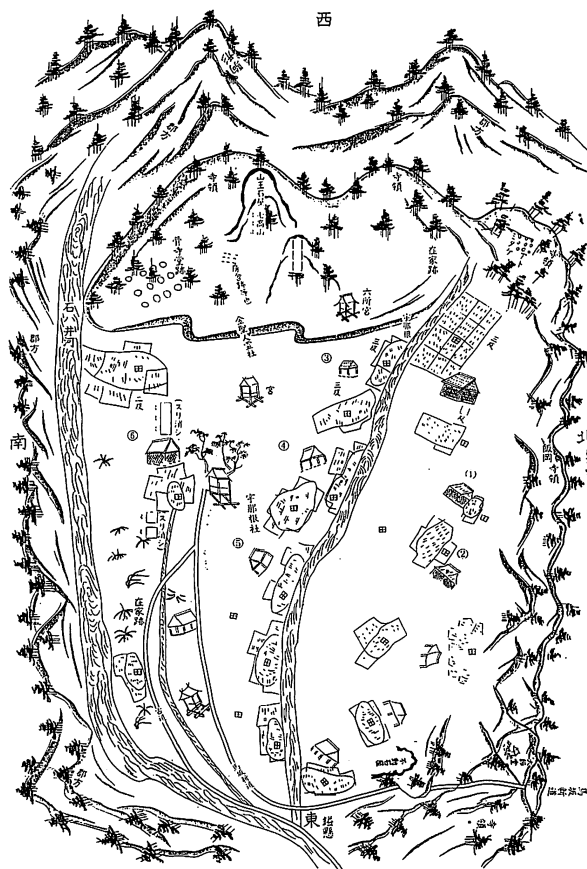


図2 陸奥国骨寺村絵図（詳細絵図）

（図1、2 いずれも一関市博物館図録『中世荘園骨寺村』（2008）より転載）

含めた、いわば思想世界を描きこむものであることを学習主体に提示することができる。

また、図2（詳細絵図）からは、田地の形状について、不整形の小規模なものと、方形の12に区画された大型の用地とを対比することができる。前者は、周囲の山からの湧水、中川（檜山川）からの直接の引水がなされたであろうことが想定され、後者は、井堰を設け用水溝を通した灌漑がなされ、個々の農民の資力や計画力では実現不可能とも思われる大規模な計画的開発がなされたであろうことを示すものであることがわかる。同様に、同図には、「古道」と「馬坂新道」の二つの道が描かれており、「古道」が岩井河の崖にそう細い道で、馬などの交通は難しいものであったと思われるのに対して、「馬坂新道」は、山へ登る形に描かれ、馬が越えることのできる坂道であったと考えられている。こうした方形の水田開発や交通路の整備には、中世に多い事例としての天台宗の聖らによる、道路や水田の開発などの土木事業の主導が想定されている。同時に彼らは、法華經の信仰を村へ持ち込み、その開発が平安末期に進行していく中で、当該所領が中尊寺経藏別当領に寄進されていくこととなるわけである（大石、2004参照）。佐藤弘夫によれば、天台聖は、11世紀末から、地方において、最新の土木技術を用いて新たな道を開設し、灌漑用水路を開削して土地開発を進め、開発、買得した所領には、日吉社・白山社など天台寺院守護の神体を勧請し、水陸交通の要衝に寺院を建立・再建して教線を拡大していったという（佐藤、2010）。当地に残り、絵図にも描かれる山王岩屋・慈恵塚は、いずれも天台宗系の影響力を明示するものであり、天台宗の聖らが、骨寺村の開発に関与したものと考えられ、同時に、道路新設に典型的な地域の開発の様相を両

図から比較し、その開発が、図1から図2の状況に変化、進行したことを類推することができる。当該絵図は、中世期における宗教勢力による地方への教線拡大と開発による所領拡大、並びにそうした所領拡大の経過を指し示すものとして学習主体に提示することが可能となるのである。

加えて、吉田敏弘の指摘によれば、図2では、一切装飾を持たない家と、屋根や壁面に装飾が施された家とが描き分けられており、それが、村落内身分や階層の差異を示すものとされる。また、吉田は、前者の田地が天水灌漑であるのに対して、後者の田地は中川添いの用水路灌漑であることを想定し、前者は、「中尊寺支配以前から村内に定着していた草分け百姓の系譜を引く」もので、先行した天水灌漑の開発の後に、中川添いの用水路が開発されたと推定している。前者の田地は、村内開発・定着のシンボルともみなされる宇那根社の傍らにも見ることができ、これを宇那根社の祭祀を担う、村内の中心的な草分け農民であったかとも想定している（吉田、1989）。こうした事例は、前述の村落外勢力の開発に先行する形での天水灌漑による村内開発と、村落内において村落祭祀も司る「草分け」としての有力農民層が形成されていたことを明示するものであり、前記した宗教勢力による地域開発と対峙する形での村落の内部勢力による地域の開発と有力農民層の形成とを把握させ、学習主体に提示することができる。

歴史教育の場で、残存する2枚の荘園絵図を活用すれば、当該絵図を見比べつつ、村落絵図に込められた地域観を把握させることや、図像内部の表現の相違点に留意させながら、学習主体の認識が図りにくい、平安末期から鎌倉期における荘園開発の実際について理解させるとともに、中世期地域村落の状況を強く印象付け、認識させることが可能となる⁷⁾。なおかつ、こうした「絵図に残る中世世界」の一端としての、当時の民衆の山岳信仰や寺社への崇敬、土地利用のあり方まで、今に残るその景観から、正に実態に即しながら認識することが可能となるのが当地の大きな特徴なのであり、実際に当地を訪れることで、その理解は格段に深まるものと思われる。しかしながら、歴史教育の場において、その有用性が大いに認められ、教育旅行の適地としても認識できる当地について、教育旅行地としての活用は進められていない。その課題については後述することとする。

(2) 文化的景観としての骨寺村荘園の概況と景観保全の取り組み

当地は、平泉をめぐる世界文化遺産選定の動きを契機に、2000年代に入ってから、その景観がにわかに注目を集め、史跡保存と景観保全策が取られることとなる。本項では、史跡・景観の保存活動が進むこととなる経過と、その取り組みについてまとめることとする。

当地の史跡保存をめぐるのは、2005年に、絵図等により現地比定される場所及び発掘で確認された9ヶ所が「骨寺村荘園遺跡」として国史跡に指定されるとともに、2006年7月には、「一関本寺の農村景観」として、全国2例目の重要文化的景観⁸⁾に選定された。重要文化的景観選定に先立って、一関市は、その自然環境、土地利用の歴史的変遷、生活・生業の視点からみた文化的景観の特性として、以下の4点を挙げている（一関市、2006）。

- ① 中世の荘園の様子を伝える絵図と、現在の景観を比較できる稀有な場所である。
- ② 散居の居住形態や水利系統などに伝統的な土地利用を色濃く残している。
- ③ 里と里山の連続性が保たれ、豊かな自然環境が維持されている。
- ④ 時代に応じた技術や工夫を加えつつ、農村のくらしをゆるやかに発展させてきた。



写真1 小区画水田



写真2 曲がりくねった畦畔



写真3 改修された水路



写真4 地域行事「稲刈り体験交流会」

(いずれも、著者撮影)

これらを当該報告書は「地域固有の要素＝『本寺地区らしさ』を見出せる点」としているが、正に歴史的な経過を経ながら当地域にこそ残された貴重な景観であると概括できよう。

さらには、そうした状況と並行する形で、平泉を中心としたユネスコ世界文化遺産「平泉—浄土思想を基調とする文化的景観」の登録運動が生起する中、2003年に、当地は平泉文化を補完するコアゾーンの文化的景観として候補地に組み込まれた。しかしながら、そうした景観の意義も含めて、結局は、当局に理解されるには至らず、2008年7月、平泉の世界文化遺産「登録延期」が決定され、それを受けた候補地の再編において、当地は構成資産から除外されることとなる。その後、2011年6月、平泉は、中尊寺・毛越寺など5つの構成資産からなる「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群—」として世界文化遺産に選定された。その後、2012年9月、当地は、奥州市に残る長者ヶ原廃寺跡など平泉に関わる世界文化遺産登録時に除外された他の4資産とともに世界文化遺産選定のための国内暫定リストに登録されている。

当地の研究と景観保存に長年貢献してきた吉田敏弘は、当地の景観について次のように述べている。

この村には人々の耳目を驚かせるものは何一つありません。それこそ、どこにでも存在するような農村風景が広がっているだけです。(中略) この村には、日本の多くの村では既に失われてしまった、前近代的な水田景観の要素が今も生きています。(吉田、2008、p.7、下線は引用者による)

現在、「どこにでも存在するような農村風景」としての当地において、歴史的経緯を踏まえつつ、「前近代的な水田景観の要素」を保全するための施策が岩手県・一関市を主体に講じられるとともに、地域住民も、地域づくりのための組織を発足させ、世界遺産構成資産からの除外という予想外の出来事に遭遇しつつも、地区内外の人々との交流事業と地域おこしを展開している。

表1 平泉の世界遺産選定経過と骨寺村荘園遺跡の関わり

年 代	項 目
1960 年代	本寺地区、農地整備事業受け入れ検討
1995 年（平成 7）	本寺地区に基盤整備事業推進委員会発足 →土地改良区組織参加 →意見統一が図れず基盤整備断念
2000 年（平成 12）	「平泉の文化遺産」が世界文化遺産推薦暫定リストに掲載
2003 年（平成 15）	専門家からなる世界文化遺産登録指導委員会（平泉町）で、骨寺村を構成資産に追加することが提言
2004 年（平成 16）	本寺地区に地域づくり推進協議会発足
2005 年（平成 17）	骨寺村荘園遺跡が国史跡に選定
2006 年（平成 18）	「重要文化的景観」に選定（近江八幡に次ぐ2例目） 「平泉—浄土思想を基調とする文化的景観」（平泉町・奥州市・一関市）…世界文化遺産への推薦決定
2008 年（平成 20）	平泉の世界遺産登録延期
2009 年（平成 21）	平泉の世界遺産申請構成資産見直し→骨寺村荘園遺跡など除外へ
2011 年（平成 23）	平泉を世界文化遺産登録決定
2012 年（平成 24）	平泉に関わる骨寺村荘園遺跡など五つの文化遺産、世界遺産暫定一覧表に追加記載

（筆者作成）

まず、行政側の取り組みを挙げれば、岩手県・一関市は、「一関本寺の農村景観」に関わる保全施策として、岩手県を実施主体とし、一関市農地林務課が主管する形で、2008年度から2012年度までの5カ年計画により、総事業費6億円余りの「骨寺村荘園景観保全農地整備事業」を実施した。当事業は、一関市農地林務課が主管し、国55%、県30%、市15%の事業費負担割合で実施され、通常の農地整備であれば5%程度負荷される農家の自己負担は皆無であった。農業従事者78戸（2011年現在）の本寺地区に対して、特例的措置として当施策が実施されたことがうかがえる。事業内容は、景観保全型の農地整備事業であり、これにより、区画整理、農道、農業用排水施設、暗渠排水等の整備が実施された。実施形態の事例としては、歴史的経過で残存している小区画水田や曲がりくねった畦畔は残存させ、農道整備では幅員を狭めつつも、軽トラック1台分が入れる程度は確保し、現場で発生した土と細かい碎石を混ぜて舗装し、緑化が図られている。また、当事業の特徴的なものには、小区画水田が残る区域では、水路をコンクリートの形状から石積みなどでいわゆる土水路として整備するほか、区域によっては、土水路の両側を木でブロックする木柵も設置しているという事柄もある。結果、同地では、全長21kmにもなる土水路を保持・管理していくこととなった。

次に、住民主体の活動では、当地が世界文化遺産候補地域にリストアップされる中で、2004年に、本寺地区地域づくり推進協議会が設立され、地域活性化のための活動に取り組んでいる。聞き取りによれば、そもそも、地元住民は、市街地から遠い、伝統的な農村地域である当地区について、誇

るものが何も無いとして、それまでは、市内他地区に対してコンプレックスを抱いていたといい、「以前は、本寺地区出身であることは、市内他地区では、あまり口にしなかった」との話もあった。そこに、世界文化遺産登録選定の提示があった時には、「天から降ってきたような話」としてみなが驚き、地区に誇るものが出来ると歓迎する一方、登録がなされた場合の地区の生活について憂慮する声も聞かれたという。そうした中で、先述の協議会が発足し、聞き取りによれば、設立時には、年間で163回もの会議が開かれ、地区にとって世界遺産がどのような効果をもたらすのか、また、地区にはどのような魅力が隠れているかなど、世界遺産選定を見越した形で、地域の振興と今後のあり方をめぐって、熱のこもった討議が展開されたといい、住民それぞれが、ともすればコンプレックスの対象でもあった地区のあり方について改めて見つめ直す好機となったという。こうして、世界遺産登録地選定への動向は、地域住民の地域認識の覚醒において、その重要な契機となったわけだが、その後、当地は、先述の通り、世界文化遺産選定候補地から、突然、除外されることとなる。その際の住民の困惑ぶりは相当なものがあり、そもそも世界文化遺産候補地をめぐる働きかけは住民側から提案したものではなく行政側から提起された案件であったこともあり、行政側による、正に手のひらを返したような候補地除外の決定には、地域住民は、「驚き」「憤り」「平静ではいられない気持ち」であったという。しかしながら、世界遺産選定の動きが、住民の地域観の見直し、村おこしの始動につながったものであるとして、なお、世界文化遺産選定のための国内暫定リストに登録されているものの、現在では、「世界遺産に選定されればそれもいいが、それにこだわるものではない」といった声が、協議会の多くの方々から聞かれた。地道な活動と併せて、地域の歴史や文化を活かした魅力あふれる地域づくりを、これからも継続していきたいとした声もあった。当協議会は、現在は、土水路の泥上げ作業や草刈り作業、区画の小さな田での共同作業に加えて、他地域からの参加者を交えた田植え、稲刈りの体験交流や、秋の収穫祭、当地で収穫した農産物を、時代衣装をまとうて冬の雪の中を中尊寺まで収める米納め行事などを主催し、地区内外の人々との交流事業と地域おこしを展開している。そうした活動が評価され、当協議会は、公益財団法人都市づくりパブリックデザインセンターが主催する平成26年度「都市景観大賞」(景観教育・普及啓発部門)において、優秀賞を受賞している。

当地における世界文化遺産構成資産への選定とその撤回という事態は、行政と住民の間での軋轢を生むことともなったが、一方で、世界遺産をめぐる「騒動」も契機としつつ、行政側は、当地の景観保全をめぐる、特例ともいえる先進的な措置を展開することとなり、また、住民側も、「誇るべきわが村」としての郷土意識に目覚め、これまでになかった、積極的な地域おこしが繰り広げられることとなった。先にも触れた通り、当地の歴史的経緯は、専門研究者の間で知らない者はないと言っても過言ではなく、歴史研究の場では名の知られた場所である。しかしながら、研究者、学会の間での知名度の高さが当該住民の心を動かすことはほとんどなく、市街地から離れた「携帯の電波も届かない辺鄙な場所」(住民談)としての地域住民の屈折した思いを解消させることは困難であったわけだが、世界遺産としての、一般からの外からの「まなざし」が注がれることで、地域住民の地元意識は一気に高揚し、また行政側の特別な施策も展開されることとなる。功罪あいまじる世界遺産をめぐる議論にあって、当地について見るならば、その世界遺産化は今のところ実現されてはいないものの、候補の段階で構成資産の一つに取り上げられたことで地域観が一挙に変転することとなるとともに、一地域に投下される予算としては莫大な金額が投じられて環境保全策が取

られることとなった、いわゆる世界遺産効果の一つの典型として見出すこともできるだろう。

また、近代に至って、各所において展開された「開発」という名の下の「破壊」に、たまさか難を逃れた当地が、官民一体となって、地域活性化に取り組む現状こそは、これからの社会における「持続可能」なあり方を学ぶ上で、正にこれからの社会教育、社会科教育の本旨に適うものとなるにちがいない。旧来の発想において、「地域での暮らし」を向上させるための方策は、自動車や農機具が使いやすく、また農作業を簡便化させるために、伝統的な村落景観、地域景観を破壊し、より「使い勝手のよい」地域を創出することにあった。その結果、全国的な圃場整備が押し進められ、川筋は改変され、里山は削られ、野仏は路傍に打ち捨てられ、地域が伝統的に保持してきた歴史的空間、景観は全く失われることとなった。そして残されたものは、地域の疲弊と人口流出、地域観の喪失に伴う、「漂流する地域像」である。そうした現況にあって、「観光のまなざし」が注がれることで、地域住民が地域の有するその価値を見直し、地域再生に取り組むその方向性は、他の地域を大いに勇気づけるものとなるであろう。

なおかつ、当地における一見、「何もない」中に有する優れた歴史的な地域景観こそは、過去の歴史状況から現在の景観保存のあり方に至るまで、正に「学ぶ観光」の適地とされるべきである。しかしながら、当地における「学ぶ観光」はいまだ浸透するには至っていない。2014年10月の関係者への聞き取りによれば、当年度は、中学校・高校の修学旅行で当地区においていわゆる民泊が行われ、5月に北海道小樽市の中学校、9月に大阪市の高校が利用するなど、当地の修学旅行等の教育旅行における注目度は高まりつつある。しかしながら、聞き取りによれば、視察に訪れた中学校社会科教師は、「何も無い。これでは生徒は飽きてしまう」と現地ガイドに語ったとも言い、周辺地域でも、当地への遠足なり修学旅行なりが実施されることはほとんどない。「生きた地域資源」に気づかせるための周辺地域からの積極的な教育旅行としての活用が望まれるとともに、広く各地から、当地のような文化的景観における修学旅行の実施が広がることは、迷走しつつあるともいえる教育旅行の現況に大きな刺激を与えることとなるであろうことは間違いない。伝統的・歴史的な農村としての当地は、一見すれば単なる農村景観が広がっているにすぎず、観光者への視覚的、感覚的刺激に乏しい中で、その知名度も圧倒的に低いというのが現実であり、観光としての観点からもその「わかりにくさ」は大きな課題であるといえる。だが、そこにこそ、その景観の持つ意味合いを生徒に伝え、その価値を考えさせ、地域から学び、学ばせる観点が必要となってくるのである。

(3) 「学ぶ観光」の実践

筆者は、主管するゼミ活動の一環として、2012年8月末から9月初旬にかけて、平泉町及び一関市本寺地区において、本学本学科3年次生12名を引率し、4泊5日の調査巡検を実施した⁹⁾。内容としては、巡検前に関連文献を読み進めるとともに、現地では、全体で史跡見学並びに、当地市役所及び観光協会等から聞き取りを実施し、一関市本寺地区では、地理・歴史班、地域振興班、観光班に分かれて、現地住民、来訪観光者らからの聞き取り、アンケート調査等を実施した。巡検の最後には、調査の成果を、一次報告という形で地域住民の前で発表した。参加学生にとって、アンケート調査、住民への聞き取り調査など本格的な地域調査は初めての体験で、学生らは、戸惑いつつも懸命な取り組みを見せたほか、学生らのほとんどは、首都圏在住で、農村部に立ち入った経験もほとんどなく、とりわけ後半2泊は地区の公民館施設を利用させていただき、風呂もない自炊生活

であったことから、周辺環境も含めて、学生らには、通常の生活とは切り離された地域体験を課すことともなった。

そうした調査に参加した学生のうち4人の者が、次のように当該巡検の感想をまとめている（須賀ゼミ、2013、下線は引用者）。

- ① 今回、夏期合宿の巡検地として平泉と本寺地区に決まったことで、私ははじめて骨寺村荘園遺跡の存在を知った。

事前学習の中で、私は骨寺村の名の由来について関心を持ち調べた。慈恵塚の髑髏伝説や、絵図の時点ですでに礎石しか残っていない骨寺の存在など、その歴史はとても魅力的であった。また、重要文化的景観であるということについても、曲がりくねった水路や畦畔、水田の段差など、中世から変わることはない風景について学ぶことで、ここがいかに関史的に重要な場所であるのかを知った。しかし、その時点ではまだ、あくまでも本の中の話であった。

そして、合宿3日目、ついに本寺地区を訪れることとなった。正直、ただ車で走っている分には、ごく普通の田園風景であり、地区に入ったのにも気がつかないほどであった。しかし、ガイドさんの案内で慈恵塚に登る途中の坂道からの景色を見たとき、「これが骨寺村荘園遺跡か」と実感し、写真で見たのと同じ景色に感動した。私の中で本の中の存在であった骨寺村が、現実のものになった瞬間であった。

私は地域振興班として調査を行っていたため、地元の方々との交流が多くできたように思う。そのお話を聞いている中で、「地域を良くしよう、次世代に繋げていこう」という気持ちを多くのみなさんが持っている事に驚いた。地域振興は、行政の頑張りだけでは決して達成できるものではない。地元の人々が、他人事だと思わず、自らも当事者であるという気持ちで、地域づくりに協力的である姿勢は、それ自体が他の地域に誇れるものであると私は思う。（中略）

また、今回は最終日にレンタサイクルで地区を散策した。駒形根神社や自然と人の共存した地区全体の雰囲気には、単純に、懐かしいようなキラキラした美しさを感じた。これは、実際に地区を訪れる事があれば、例えば歴史を深くは知らなくても、美しい景観の魅力はきっと伝わると、私は思う。

- ②（前略）まず、骨寺村荘園遺跡と聞いて、どのような観光地なのか、全く想像が出来なかった。（中略）

私たちの巡検の大部分は三日目からの本寺地区での活動だろう。写真を見ただけでは、何も感じなかったが、降り立ってみて、一面に広がる緑の広大さに触れ、このような感覚は、東京では絶対に味わえないだろう、と最初に考えた。（中略）

そして、私が参加していた班は、若神子亭でのアンケート調査を中心に行っていたため、訪れた方々のナマの声を多く聞くことが出来た。そこで、このような観光地がぶつかる問題に直視できた。アンケートに答えて頂いた方の意見の中で「フラワーパークを建設したらよいと思う」という声は、まさにこの問題を訴えているように思える。この意見は本寺地区がどのような観光地か深く知られていないからこそその答えだろう。歴史的な素材を如何に上手く利用していくか、それが重要なのだと気付かされた。

美味しい食べ物に、のどかで豊かな歴史的田園風景、これらを感じられる場所はきっとほか

にはない。だからこそ、もっともっと多くの人に知られて欲しい。写真だけでは絶対に伝わらない感動を味わえる場所なのだ。もう一度、今度は秋の金色に輝く骨寺村莊園遺跡に会いに行きたいと、今は思っている。

- ③（前略）8月31日から、いよいよ骨寺村莊園遺跡に足を踏み入れました。事前調査を含め一関市博物館での中尊寺と骨寺村莊園遺跡の歴史的関連性を学んだあと、実際にその場所にやってきたときの感想を一言で表すと「どこからどこまでが遺跡？」でした。しかしその後、実際に足を運んで感じる骨寺村莊園遺跡は、今この場所が過去の絵図につながるんだ、と思えば思うほど、守るべき場所であり、多くの人に知っていてほしい場所だと、私は感じました。確かに研究者の方々の「単純な観光客に踏み荒らされたくない」という気持ちも痛いほどわかりました。本寺地区は、今も昔と変わらず生活し、あの素晴らしい風景を継承しています。だからこそ、環境を守りながらも観光化に進み始めている骨寺村莊園遺跡のことを多くの人々に知ってもらいたいと私は思いました。私は、若神子亭でのアンケート調査を二日間させていただいたのですが、本寺地区の皆さんは本当に優しく、調査をしているところに頻繁に顔を出して励ましてくださったり、土産物の試食をさせてくださったり、アンケート用紙が足りなくなった時には印刷を協力してくださったりしました。巡検の間、本当に楽しく安心して過ごせたのは皆様のおかげです。本当にありがとうございました。また骨寺村莊園遺跡に訪れる方々も快くアンケートにご協力くださり、この場所は絵図の描かれた時代と今を繋ぐように、人と人の笑顔を繋ぐ場所なのだ、と私は感じました。

- ④（前略、平泉等の見学を終えて）その後はいよいよ骨寺村への訪問及び滞在。私が心配していたことだ。しかし、実際に骨寺村へ訪れてみると、村に生える木々の美しさや土用水の素晴らしさ、村の独特な雰囲気など本で読んだとき以上に感じた。私たち地理歴史班はレンタサイクルを用いて村内を散策したのだが、これは良い経験になった。自分の足で訪れてみることで、村の素晴らしさや、逆に観光地としての骨寺村の改善点なども発見することができた。宿泊地である古曲田家休憩所もとても居心地良く、快適に過ごすことができた。二日間という短い間の調査であって、とても拙い発表となってしまったが、それでも村の方々は真剣に聞いてくださり、貴重なお話をたくさん聞くことができた。今回の巡検で、自分の足で稼ぐことの重要性を改めて感じた。本を読むだけでなく、実際にその場所を訪れて現地の方々に話を聞くことで、新しい視点を発見したり自分の確固とした考えを持つことができる。これは、観光的面だけに限らず、様々な場面において応用できることだろう。

掲出した学生らの意見を分析すれば、筆者の提案した調査対象地として当地への事前の認識・知識はほとんど無かったということであり（①②）、また、調査自体を不安視していた者もある（④）。訪問当初も、「ごく普通の田園風景」であり、史跡の領域範囲もわからず、その景観の意味もわからなかったということである（①③）。しかしながら、その後、調査を続ける中で、当地の風景や歴史的景観の意義が理解できたということを挙げ（①②③④）、なおかつ、景観を維持しつつ地域おこしに取り組む人々の姿を体感し、住民の地域への思いを実感できたともしている（①③）。さらには、歴史的景観を度外視した単なる誘客のしかけを提案してきた観光者への戸惑いを示す者や（②）、連綿と続いてきた当地の歴史状況が、地域住民と観光者との交流の場を作り出す、とする歴

史的景観を有する当地における観光の意義を見出す者も現れた（③）。調査巡検を通して「新しい視点を発見したり自分の確固とした考えを持つこと」ができたとする者は、「観光的面だけに限らず、様々な場面において応用できる」とし、当地での一種の社会体験を今後の場に生かしていきたいとしている（④）。いずれの学生も、当初、筆者が巡検地として当地を設定した時には、貴重なゼミ調査の機会に、自分たちの知らない場所をあえて訪れることについて戸惑う声が多く、そうした意識は事前学習を進めていく中でも大きな変化は無かった。また、実際に当地を訪れた後も、最初は、当地の持つ特徴・意義を見出すことはできないでいた。しかしながら、調査を進めていくうちに、「本の中の存在であった骨寺村が、現実のもの」となる中で、当地の歴史的景観の意味を理解し、一方で、そうした景観の意味が理解できず安直な誘客策を言う観光者を批判するまでに至っている。学生らは、一見してはわからなかった当地の持つ景観の意義を、現地を歩き回ることによって体得し、また、当地の持つ地域の魅力を、地域住民との交流を図り体験することで体感するとともに、今後の場に生かされるであろう「新しい視点」をも獲得することとなった。

当該実践は、観光調査を目的にしたものではあったが、こうした調査を連日続けることで、学生は地域観を変容させ、歴史的景観がもたらす地域の魅力と、そうした景観なり歴史状況が誘因となって地域の人々を動かすこととなる影響力に気づいていったわけであり、当該学生らこそ、正に「学ぶ観光」を体現したことにほかならない。一方で、地域の人々の行う何気ない一挙手一投足を、学生らはあるいは驚き、あるいは敬意を持って見つめていくわけで、そうした学生らの「まなざし」を通して、地域の人々が、改めて自らの地域とその歴史を見直す契機ともなっている。一見してはわかりづらい、地域の歴史的経過に由来するその文化的景観から、来訪者としての学生は、そこに裏打ちされた歴史状況と、景観保全のための地域の人々の取り組みを認識しながら、豊かな地域像を構築していくこととなり、また、外部からの再評価としての「まなざし」を受けることで、「何もない」として自らの地域を低位に置き、都市部との比較から抱いていた地域の劣等意識は、地域の人々の意識から一掃され、地域づくりの新たな取り組みに向かわせている¹⁰⁾。こうした状況からは、地域の歴史状況が媒介となり、訪れる側と迎え入れる側の双方が、瞬時には体感するものとはなりえないその地域の魅力を、直に交流することで改めて認識するに至っていることが把握できる。当該実践をふまえて、歴史理解はもちろんのこと、歴史意識構築の底流としての地域観を再認識させる機能も含めて、そこにおいて発現される「学ぶ観光」の意義を改めて提起することができるのである。

当該調査・実践は、観光学科ゼミ活動における地域調査であり、そもそも「観光」「地域」に関心のある者がゼミ活動に参加し、高い意欲・関心の下で実施された点を勘案すれば、社会科教育・歴史教育の場に供する実践として掲出することは適当ではないかもしれない。しかしながら、参加学生の中には、当該調査の前には平泉の場所さえ覚束なかった者や、荘園という概念それ自体も認識できない者もいた。そうした学生が、「歴史の場」としての地域に立ち、その歴史的な経過と、そこに息づく地域の人々の自らの地域への思いを体感したことは、主体的に歴史を学び、またそれらを学びとることの意義を実感し、社会認識を構築する結果となった。ここにおいて、「学ぶ観光」は体現され、同時に社会理解にも連関されるべき主体的な歴史の学びが貫徹されたと考えることができるのである。

4. 「観光文明学」から「観光歴史教育論」へ

石森秀三は、「観光現象をめぐる文明システムを総合的に研究する新しい学問分野」としての「観光文明学」の方向性を提唱している（石森、2001）。過去から現在、また地域から世界へと様々に広がる文化的要素・社会的状況を観光の視点から捉えなおすことには大いに意義がある。同時に、その方向性は、教育にも応用されるべきで、筆者がかつて触れた、地理的観点をふまえつつ、歴史遺産・歴史事実を現代の視野から考察する「観光歴史教育論」の視点（須賀、2010）、及び、佐藤克士の言う、観光状況を素材とすることで「現代社会を適切に認識させるための教育内容」としての「社会科観光」の観点（佐藤、2013）にも正に合致するものである。

歴史教育の場で、歴史事実を安直に現代の社会状況に置換させ、現代の価値観を基に判断を促すことは厳に慎むべきものであろう。しかし、その一方で、社会科歴史の観点から歴史像をまなごすとするならば、現代の社会状況を照射する歴史事実なり「歴史の場」なりを主体的に体感させ、そこから何を学びとるか、またそれらが地域に残したものは何かといった観点を学習主体に迫ることが必要となってくる。そう考えた時、歴史を学ぶことの新たな方向性は、単に歴史事実を理解するのみにとどまらず、「歴史の場」としての景観を理解し、それらが地域とそこに住む人々にどのような影響を及ぼしてきたのか、また、その景観保存のためにどのような施策を講ずるべきか、といった着眼点を見出すべきではあるまいか。そうした観点を基とする中で、地域の持つ歴史的・地理的状况を包括的に理解する「学ぶ観光」が成り立つこととなり、同時に、主体的に学ぶ歴史教育のあり方も確立されていくものと規定することができるのである。

〔註〕

- 1) 2014年6月8日付『朝日新聞』朝刊。
- 2) 1983年7月30日付『朝日新聞』朝刊。
- 3) 1997年6月には、大阪府の中学3年生の複数の生徒が、修学旅行先の長崎市で被爆者の独り芝居を観賞中、出演者らに暴言を浴びせたり、舞台そでの関係者にあめ玉を投げつけたりし、教師と生徒が謝罪するという出来事があった（1997年7月16日付『毎日新聞』大阪朝刊参照）。
- 4) 2014年8月21日付『朝日新聞』朝刊・長崎地方版。
- 5) 関連して、2005年8月4日付『読売新聞』西部朝刊は、当事案をめぐる連載特集記事で、『「姿勢を低くして聞きなさい、というような目に見えない強制力が嫌だったのだと思う。真剣に聞かなければいけないというような関係性を強要される。つまらないと思うのも、退屈だと感じるのも自由なはずで、それが許されない関係はおかしい』とする地元那覇市の雑誌編集者の声を挙げながら、「どんな悲惨な体験をした人でも、それを特権的に語る、つまり耳を傾けることを強要する資格はない。青山学院高等部の問題が明るみに出た際、新聞に載った元ひめゆり学徒たちの談話のニュアンスに、特権的な話者の響き聞き取って、一瞬、嫌なものを感じた人はいなかっただろうか」として、批判一辺倒の当該事件の取り上げ方に疑問を投げかけている。
- 6) 「観光学研究」における岩手県一関市厳美町本寺地区調査巡検の実践については、既に別稿でも取り上げた（須賀、2015）。本稿における、当該地区荘園遺跡の概要、並びに巡検参加学生意見の分析等は、当該稿と一部重複するものとなるが、文化的景観における観光施策展開の意義を論じた別稿に対して、本稿は、歴史教育に資する「望ましい」歴史観光者育成のための実践として論述したものである。
- 7) 実際、筆者は、勤務校において、歴史観光の授業、教職系日本史授業で、当絵図を活用し、2つの絵図を対比させる授業実践を実施しているが、当該授業から、当初は絵図情報に困惑する受講学生らが、その類似点、相違点を見つけ出し、絵解きを進めていく中で、地域の歴史状況を認識し、それを手掛かりとして当時の荘園開発をめぐる概況を理解していく様子を見てとることができる。

- 8) 2004 年、文化財保護法の改正が施行され（翌年公布）、文化財の定義として新たに文化的景観が設定された。また、同改正法により、文化的景観の中で、特に重要なものについては都道府県又は市町村の申出に基づいて、重要文化的景観として選定されることとなった。こうした動向は、1992 年に、文化遺産の範疇に「文化的景観」の概念を組み入れることを世界遺産委員会が決定したことに示されるように、文化遺産における景観の重視という国際的な思潮と軌を一にするものであり、単体としての文化財に向きがちであった行政側の文化財保護の姿勢が、歴史的・地域的特質を背景とした地域景観全体を保持、保全していこうという動向に変化したことを指し示している。その後、重要文化的景観は、年々増え続け、2015 年 1 月現在では、北海道から九州まで各地に 47 カ所が設定されている。
- 9) 当該巡検の成果は、当年度末に、調査報告書としてまとめている（東洋大学須賀ゼミ、2013）。
- 10) 聞き取りによれば、本寺地区の様々な取り組みについて、周辺村落は関心を持ちつつも、地区がまとまって、そうした取り組みを行うことはほとんどないという。「本寺は特別だから」と言い、うらやましがらばかりで、自らの地域を活性化させる方策を取ることは、既に諦めている状況があるという。外部からの「まなざし」の差が、地域おこしに大きな影響を与えていることがわかる。一方で、一定の地域が地域活性化に成果を取める中、その周辺地域にその影響力をどう波及させ、地域全体に活力を与えるためにどのような方策が施行されるべきかとした観点は、閉ざされがちな地域同士の関係性構築とともに大きな課題として認識する必要がある。

〔引用文献〕

- ・池野範男「学校における平和教育の課題と展望－原爆教材を事例として」『松尾雅嗣教授退職記念論文集 平和学を拓く』IPSHU 研究報告シリーズ、42 号、2009 年。
- ・石森 秀三「21 世紀における自律的観光の可能性」『国立民族学博物館調査報告』23 号、2001 年。
- ・大石直正「絵図研究の成果」一関市博物館編『岩手県一関市埋蔵文化財調査報告集第 5 集 骨寺村荘園遺跡』2004 年。
- ・カロリン＝フンク「『学ぶ観光』と地域における知識創造」『地理科学』第 63 巻第 3 号、2008 年。
- ・黒田日出男「描かれた東国の村と堺相論—陸奥国中尊寺領骨寺村絵図との＜対話＞—」国立歴史民俗博物館編『描かれた荘園の世界』新人物往来社、1995 年。のち、黒田『中世荘園絵図の解釈学』東京大学出版会、2000 年に改題、収録。
- ・佐藤克士「観光研究の成果を組み込んだ『社会科観光』の授業開発とその評価 —小学校第 5 学年産業学習『観光産業』を題材にして—」『社会科教育研究』118 号、2013 年。
- ・佐藤弘夫「霊場と巡礼」入間田宣夫編『兵たちの極楽浄土』高志書院、2010 年。
- ・穴戸学「学習型観光の意義と教育観光としての現状と課題」『日本観光研究学会第 26 回全国大会論文集』2011 年。
- ・新谷恭明「日本最初の修学旅行の記録について —平澤金之助『六州遊記』の紹介—」『九州大学大学院教育学研究紀要』第 4 号、2001 年。
- ・須賀忠芳「『観光歴史教育論』の構築とその試み」東洋大学国際地域学部『観光学研究』9 号、2010 年。
- ・同「『学ぶ観光』としての修学旅行の意義とその課題 —福島県立会津高等学校の取り組みから—」『日本国際観光学会論文集』20 号、2013 年。
- ・同「文化的景観における観光施策展開の意義とその可能性 —『一関本寺の農村景観』を題材に—」『日本国際観光学会論文集』22 号、2015 年。
- ・東洋大学国際地域学部国際観光学科須賀ゼミ『平泉・骨寺村調査巡検報告～世界遺産としての平泉のあり方と骨寺村荘園遺跡における地域づくりの現場を見る～』2013 年。
- ・山口誠『グアムと日本人 戦争を埋立てた楽園』岩波新書、2007 年。
- ・吉田敏弘「骨寺村絵図の地域像」葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー』下巻、地人書房、1989 年。
- ・同『絵図と景観が語る 骨寺村の歴史～中世の風景が残る村とその魅力～』本の森、2008 年。